

ジョルジュ・サンド——ギュスターヴ・フロベール 往復書簡を読む (III)

持田明子

(1997年5月21日受理)

IV. 1867年

1863年1月、「ラ・プレス」紙にG・サンドが、その前年の11月末にミシェル・レヴィ書店より出版されたG・フロベールの『サランボー』を賞賛する記事を執筆し、批評家から攻撃を受けたこの作品を弁護した。これを契機に2人の作家の文通が始まり、とりわけ1866年以来、頻繁に書簡が交される中に、深い友情関係が——友情のみとは言い切れぬ感情が相方にあったと見ている研究者もあるが⁽¹⁾——築かれるに至ったことを先に見た⁽²⁾。

1867年には、〈表I〉が示す通り⁽³⁾、G・サンドからは28通の手紙が、G・フロベールからは23通が送られた。

G・フロベールにあてた1866年11月22日付の手紙では vous と tu の混用が見られるものの、それまでG・フロベールに対して vous を用いてきたG・サンドが、1867年以降、tu を用いるようになったことを付言しておきたい。これは1876年の最後の手紙まで変ることはない。一方、17歳年少のG・フロベールは、〈大切な、お優しい先生〉に対し、どれほど親密な語り口の手紙であれ、一貫して vous を用い続ける。

*

1866年の暮、病気であることを告げた後、G・サンドからは何の音沙汰もなく、G・フロベールはその健康状態を真剣に案じ始める。

〔手紙39〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ

持田明子

〔1867年1月6日〕日曜日

さあ、大切な先生、これは一体どういうことですか？ あなたの手紙は行方不明になったのですか？ あなたからの便りを長い間、もらっていません。私はあなたがいなくて淋しい、そしてあなたのことを心配している、ええ、そういうことです。あなたが最後に書いてくださったとき、あなたはお病気でした！ 今もなお、そうですか？ 今、ノアンにいらっしゃるのか、パレゾーなのか、それともパリなのか、私には分からないのです。

あなたの懐かしい筆跡の数行を待ちながら、あなたを抱擁します。

あなたの年老いた

Gve. フロベール⁽⁴⁾

〔手紙40〕 サンドよりフロベールへ

パリ

〔1867年〕1月9日、夜

親愛なる仲間へ

あなたの老吟遊詩人は危うく死ぬところでした。相変わらずパリにいます。1月*25日に出発する予定で、荷造りも終わっていました。あなたの最初の手紙はノアンで毎日、私の到着を待っていたというわけです。やっと出発できる状態になり、同行を強く望んでいる息子のアレクサンドル**と明朝、出発します。

病に倒れ、3日間、意識を失い、まるで骨の折れる、有用な何かをやり遂げた後のように疲労困憊して起き上がるというのはまったくまぬけな話です。結局のところ、何であれ消化することが一時的に不能になっただけです。寒さのせい、それとも弱っていたからなのか、あるいは仕事のせい、私には分かりません。病気のことはもうほとんど頭にありません。サント＝ブーヴの病状の方が気がかりです。あなたも知らせを受け取っていることでしょう。彼も快方に向かっていますが、深刻な障害が残ります。そして、それによる不調が危惧されます。私にはこのことがひどく悲しく、また心配なりません。

2週間以上も机に向かっています。したがって、私の仕事は進展しませんでした。すぐに仕事ができる状態になれるかどうか分かりませんので、オデオン座に休暇を与えました。こちらの準備が整えば、私の作品を取り上げることでしょう。子供達に会った

後で、少しばかり南仏に出かけようと計画しています。沿岸地方の植物が私の頭から離れないのです。平穏な仕事、田園生活、そして、厚い、純粋な友情という私のささやかな理想以外のものに対して驚くほど無関心になりました。私は今、すっかり回復し、非常に元気ですが、長く生きることはないと感じます。かつては激しく揺れ動いた私の心のなかに作り出されている、大きくなるばかりの静謐、平安からこの予告を引き出していますよ。私の頭脳はもはや総合から分析にしか進みません。以前はこの反対でした。今では、目を覚ました私の眼前に現れるのは地球です。かつて私の関心を引き、今やあなた方と複数で呼ぶようになった自己をそこに見出すことに少し苦勞します。地球は魅力的で、非常に興味深く、好奇心をそそりますが、かなり発達が遅れていて、まだ便利ではありません。もっと見通しのいい、皆が近づけるオアシスに移りたいものです。ここでは旅をするのにかくも多くの財力が要求されます。この必要なものを手に入れようとして時間を費やしてしまい、学問と瞑想のための時間が失われます。この熱に浮かされた宿泊地ほど複雑でも、文明化されてもいない、そしてもっと、豊かな自然があり、一層容易に楽しめるところが私には必要であるように思われるのです。もし私がそこに至る道をうまく見つけることができれば、あなたは私の夢の世界にいらっしゃいますか？ ああ！ あり得ないことではありません。

ところで、あの小説は順調に進んでいますか？ 熱意は薄れていませんか？ 孤独に苦しんでいませんか？ あなたの孤独は絶対的なものではなく、どこかに美しいご友人がいらっしゃって、行ったり来たりされているように、あるいはそちらに滞在なさっているように思います。それでも、あなたの生活には隠者のようなところがありますね。私はあなたの境遇を羨ましく思います。私の方はパレゾーで死者を相手にまったくのひとりぼっちです。ノアンでは、子供達と一緒に独りきりというわけにはいきません。私は子供達を愛しすぎているため、自由に振舞うことができないのです。そしてパリでは、自分が何者であるか分からず、また、自分ほどには価値のない無数の事柄のために完全に我が身を忘れてしまうのです。

親しい友、あなたを心から抱擁いたします。あなたの母上や大切なご家族によろしくお伝えください。そしてノアンに手紙をください。私を慰めてくれることでしょう。

チーズですって？ もう覚えていません。話を聞いたような気がします。でも、思い出せません。向こうから、それについてはお知らせしましょう⁽⁵⁾。

* 12月の書き違い。

** アレクサンドル・デュマ・フィス。

〔手紙41〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ

〔1867年1月12—13日〕土曜日、夜

いいえ、大切な先生、あなたは人生の終わりに近づいてはいらっしゃいません。きっと、あなたにとっては残念なことでしょう。しかし、あなたは巨人達が長生きするように、高齢になるまで、非常に高齢になるまで、生き続けられましょう。あなたはその種族の方だからです。ただ、休息することが必要です。私を驚かせていることがひとつあります。それは、あなたがあれほどまでに思考し、ペンを走らせ、そして苦しめられたのに、一度も死ななかつたことです。あなたが望んでおられるのですから、地中海岸へ少し、お行きになるがいい！ 紺碧は緊張をほぐし、新たな力を与えてくれます。ナポリ湾のように「青春」の地があります。時として、そうした地は一層悲しみを増すのでしょうか？ 私にはまるで分かりません。

人生はたやすいものではありません！ 何と複雑で、費用のかさむ仕事でしょう！ 私はその幾ばくかを知っています！ あらゆることにお金が必要です！ ですから、少しばかりの収入や非生産的な職業では、「わずかなもの」に甘んじなければなりません。私はそうしています！ それは習慣になっています。しかし、仕事がうまく進まない日々は、まったく愉快ではありません。ああ！ もちろんです！ ああ、もちろんですとも！ あなたの後について別の惑星に行きたいと思います。お金のことで、われわれの惑星を近い将来、住みにくいものにするのはまさにこのお金です。最も富裕な者達でさえも、自分の「財産」に心を配らずにはここで生きていくことは不可能になりましょう。みんなが毎日、数時間を自分の資本をいじくり回して、利殖を図ることに費やさなければならなくなるでしょう、まったく愉快なことです！

私の方は相変わらず、自分の小説をいじくり回しています。そして、来月の半ば頃、今、書いている章を終えて、パリに行く予定です。小説はゆっくりながら進んでいます。私はまるで徒刑囚のように、骨を折って刻んでいます。私は一人（そしてかなり沈んだ一人）ですから徒刑囚ではなく、変人のように、ですね。

それから、あなたが何を推測なさろうと「美しいご婦人は一人も」私を訪れてはくれません。美しいご婦人達は私の心を大いに占めましたが、私の時間は非常にわずかしか奪いませんでした。私を隠者扱いなさるのは、きっと、あなたが考えていらっしゃる以上に適切なたとえでしょう。私は何週間も、人間とひとことも交^{かわ}さずに過ごします。そして週の終わりに思い出せるような日は一日たりとも、また出来事もひとつとしてありません。日曜日には母と姪に会います。ただそれだけです。私の唯一の仲間は、水のと

どろきが絶え、風が吹き止むと、私の頭上の納屋のなかで大騒ぎをするねずみの群れです。夜は墨を流したように真っ暗闇で、「砂漠」のような沈黙が私を包み込みます。こうした環境のなかでは感受性が途方もなく高められます。私はつまらないことで動悸がするのです。もっとも、私のようなヒステリー性の老人にあっては無理もないことですが、というのも、私は、男は女と同様にヒステリー性であり、その一人であると主張しているからです。私が『サランボー』を書いているとき、この主題に関する「最もすぐれた著作」を読み、私の症状をことごとく認めました。私は後頭にぐりぐりやはれ物ができています。こうした何もかもがわれわれの結構な仕事の結果です。精神と肉体を苦しめるからこういうことになるのです。しかし、もしこの苦しみがこの世の、唯一の汚れないものであるとしたら？

私が『コンシュエロ』と『ルドルシュタト伯爵夫人』を読み返したことは、すでに申し上げましたね？ 4日かかりました。お好きなときに、時間をたっぷりかけて、お話いたしましょう。なぜ私はリヴェラーニに「恋して」いるのでしょうか？ おそらく、それは私が2つの性を持っているからです。

ああ！ あなたは私のためにノアンで陶器に関する文章を探してくださると約束なさいました。見つけ出されたら、お送りください。

私の代わりに、ご子息夫人には恭しいお辞儀を、ご子息には握手を、オロール嬢の両頬に2度ずつキスをしてください。そしてあなたは、少しばかり私のために、どうぞお大事に。

あなたの年老いた

Gve. フロベール⁽⁶⁾

深刻な症状を見せる病の中に、G・サンドが近づく〈死〉を考え、ゲーテの言葉「いや増すばかりの静謐」を引きながら、老境に達して、ようやく勝ち得た心の平安を淡々と語った〔手紙40〕、自らの深淵を見つめてヒステリー性に言及したG・フロベールの〔手紙41〕は、2人の書簡が、各々の作品の進捗状況や、日々、胸中に去来する思いを語りあうだけでなく、時に、はるかに内面的な領域に深く踏み込むものであることをわれわれの目に明らかにする。

病のほぼ癒えたG・サンドは、人生の黄昏時に達した今、揺るぎないものとなった、自我や無償の愛についての考え、さらに芸術の意義を披瀝した長文の手紙を書く。

〔手紙42〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

〔1867年〕 1月15日

わが家に帰って来ました。夕方の数時間を除いて、かなり元気です。結局、時がたてば治ることでしょう。病気も、それに耐えているものも長く続きはしない、とは当地の老司祭の言葉です。あなたの手紙を今朝、受け取りました、親しい心の友。他の多くの人々以上に、また、昔からの、信頼できる仲間達以上に、なぜ私があなたを愛しているのでしょうか？ 私は探しているのです。今の私の状態は、

日が沈むとき あなたは

幸運を 探しに行くの？……

ですから。

そうですとも、知性の幸運、光を！ つまり、こういうことです。年を取り、人生の黄昏——色調と照り返しで最も美しいときです——に達して、人はあらゆる事柄、そしてとりわけ、愛情について新しい考え方をするようになります。力強さと個性の年齢では人は、相互的見地から、地面を確かめるように、友人を調べるものです。自分が確固として感じ、自分を導くものが確固としていることを望みます。けれども、自我の激しさが消えていくのを感じる時、人々やものごとをあるがままの姿で、それらが、自分の心の目に映じる姿で愛するようになります。それらが自分の運命に与えてくれるものによって愛するのではまったくありません。それはちょうど、夢みている美しい自分の家に置くために、自分のものにしたいと希う絵や彫刻のようなものです。私は緑のボヘミアをそこで何一つ蓄えずに駆けめぐり、今なお、放浪者で、感傷的で、吟遊詩人のままでいます。これからもずっと同様であり、放浪者のまま死ぬだろうとはっきりと分かっています。それゆえ、彫刻や絵を思い浮かべても、それをどうすればいいのか、また、たとえ所有していても、それにふさわしくどこに飾ればいいのか、分かりません。それらが冷やかな分析で冒瀆されないどこかの寺院に、人々の視線から少し離れたところに置かれているのを知って満足し、なお一層、愛するのです。そして、その地にもう一度立ち寄ろうと考えます。私にそれらを愛させ、理解させたものをもう一度目にし、いつまでも愛し続けましょう。私の個性との接触がそれらを変えることはありません。私がそれらのなかに愛するのは私自身ではありません。真実、このようにして、もはや固定しようと思わない理想が心のなかに刻み込まれます。その理想はそれ自身のままだからです。これこそが、美、善、唯一の真実、愛、友情、芸術、熱狂、そして信仰の秘密のすべてです。このことを考えてみてください。きっとお分かりになりますよ。

あなたが暮らしていらっしゃるその孤独は、晴天であれば、非常に甘美なものに私には思われます。冬には、それは克己的なものと思います。と同時に、あなたがきまって体を動かすことへの精神的な欲求を感じておられないことを否応なく思い出します。この蟄居の間、あなたの活力を消費させる他のものがありだと私は考えていました。それは素晴らしいことです。でも、それを無限に引き延ばしてはなりません。小説がまだ続くのでしたら、中断するか、気晴らしを取り入れる必要があります。大切な友、本当ですよ。肉体の生活を考えてください。それを抑えすぎているとき、肉体は憤慨しています。引きつっています。パリで病に倒れたとき、少々、常規を逸してはいるものの、非常に聡明な医者に会いました。彼はこの点について正しい事を言ったのです。つまり、彼によれば、私は過度なまでに自分を精神的な存在にしているというのです。私がまさにあなたのことを思い出しながら、人は仕事以外のあらゆるものを切り捨てることで、力を衰えさせるよりむしろ、過剰に持てるものだと言いますと、彼は蓄えることの危険は消耗の場合と同様に大きいと答えました。そして、この点に関して、あなたにお伝えできればと思うような、卓越したもろもろの事を話しました。もっとも、あなたはそれらをすでにご存知で、尊重されていないだけなのでしょう。したがって、あなたが言葉ではひどく見下しておられるこの仕事はまさしく情熱で、しかも、激しい情熱なのです！ ですから、あなたが私におっしゃったことを私もあなたに申し上げます。私達のことを考えて、そして、あなたの老吟遊詩人のことを考えて、少しばかり、ご自分をいたわってください。

『コンシュエロ』や『ルドルシュタト伯爵夫人』って、一体、何ですか？ 私の作品ですか？ 一言も思い出せません！ あなたがそれを読んでいらっしゃる、あなたが、本当にそれはあなたを楽しませるものですか？ それならば私も近いうちに読み返してみよう。あなたが私の作品を気に入ってくださるのであれば、私も自分の作品を好きになりましょう。

それから、ヒステリーであるというのはどういうことですか？ 私もきっとそうであったし、今もそうでしょう。でも、一度もこの問題を深く掘り下げたことはなく、また、自分では調べずに話に聞いただけですから、まったく知りません。それは、なんらかの不可能事を望むことで引き起こされる不安、苦悩ではないでしょうか？ そうであれば、想像力を持っているとき、私達は皆、この奇妙な病気にかかっているのです。このような病気にどうして性別がありましょう？

それに、解剖学に詳しい人々は、性はひとつしかないという見解を述べています。男と女はあまりにも同一ですから、この点に関して社会が生み出した多くの区別や巧妙な言い訳はほとんど理解できません。私は息子と娘の子供時代と成長を観察してきました。

息子は私自身でした。したがって、うまくいかなかった男であった娘よりはるかに女だったこととなります。

あなたを抱擁いたします。あなたからのチーズに舌なめずりをしたモーリスとリナがよろしくと言っています。〔……〕

私はここで回復できなければ、友人が呼んでくれているカンヌに出かけるつもりです。でも、このことをまだ子供達に話せずにいます。一緒に暮らしているとき、旅に出るのは容易ではありません。情熱と嫉妬があるからです。私の生活はずっとこうでした。一度として私のものではありませんでした！ ですから、泣き言をおっしゃればいいのです、自由にふるまえるあなたは！⁽⁷⁾

次のG・フロベールの手紙は、セーヌ河畔に建つクロワッセの館の離れ家^{パヴィヨン}で、スイカズラのつたの絡まったバルコニーに出て、水の流れが果てしなく描き出す光景をことのほか愛^めで、月光にきらめく川面を飽かず眺めたという作家の姿を彷彿させるが、彼もまた〈齢を重ねる〉ことの意味を自問する。

〔手紙43〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ

〔1867年1月23—24日〕水曜日、夜

私はあなたのご助言に従いました。大切な先生、私は体を動かしたのです！！

「立派なもの」ではありませんか？

日曜日の夜、11時、川面と雪を照らす月の光があまり美しかったので、体を動かしたいという激しい欲望にとらわれました。そこで、2時間半、散歩しました。夢中になって、ロシアか、ノルウェーを旅している自分を想像してみました。潮がさし、セーヌ河の氷塊と流れを覆っている薄氷を鳴らしたとき、それは本当に見事でした。そのときあなたのことを考えました。そして、あなたがいらっしやらないことを残念に思いました。

私はひとりで食事をするのが好きではありません。私を楽しませるものに誰かを、あるいは誰かへの思いを結びつけることが必要です。しかし、この誰かがめったにいないのです。私も、なぜ私があなたを愛しているのか、自問しています。あなたが立派な人間、あるいは魅力的な存在だからでしょうか？ 私には分かりません。確かなことは、私があなたに特別な、自分でも明確に説明できない感情を抱いているということです。

このことについて、あなたは（心理学の「大家」であるあなたは）、人は2人の人間を同じように愛すると、また、2度、同一の感覚を覚えるとお思いですか？ 私はそうは思いません。われわれ自身は生涯、絶えず変化するものですから。

あなたは「無償の愛情」について美しいことを書いてくださいました。おっしゃっております。だが、逆も真実ではないでしょうか？ われわれは自分のあらゆる愛情、あらゆる感嘆の底に、自己！ あるいはそれに近い何かを見出すのではないのでしょうか？ われわれが「善」であれば、かまいません。

いま、私の自我が私を打ちのめしています。こやつがときどき私の肩にずっしりと重くのしかかります！ こやつはあまりにのろのろと筆を運ぶのです！ そして自分の仕事の不満をもらすとき、気取ることは全くありません。何という退屈な仕事！ このような主題を探しに出かけたのは何と奇妙な気まぐれでしょう！ もっと早く進むための秘訣を私に教えてくださるべきです。それなのにあなたは「幸運」を探し求めているとこぼしておいでです。あなたが！

あなたがどんな病気にかかっておられるのか、私に話して下さっていないことをご存知ですか？ なんですか？ どんな病です？ 重病ですか？ 南仏で冬を過ごされるおつもりですか？ 余り長くではないでしょうか？ 近々お会いできないとすれば困ったものです。私は1か月後にパリに行く予定です。あなたの方はいかがですか？

サント＝ブーヴから、彼の健康状態について安心させる内容の短い手紙を受け取りました。だが、悲痛な調子でした。シプリス*の林に足しげく通うことがもうできないのを悲しんでいるように私には思われます！ よく考えてみると！ 彼は真実のなかに、少なくとも、彼の真実のなかにいます。そして、それは結局、同じことです。私が彼の年齢になる頃、彼に似るのでしょうか？ そうはならないだろうと思います。同じような青春を持たなかったのですから、私の老年は違ったものになるでしょう。このことで、私が昔、サント＝ペリーヌ**を主題にした本を空想したことを思い出します。シャンフルリー氏はこの主題を間抜けらしく取り扱っていますよ。私はこっけいなものとは思いません（主題であれ、シャンフルリーであれ）。私ならば、残忍で、痛ましいものに作り上げたことでしょう。私は、心は老いはしないとと思っています。年齢を重ねるにつれて心の働きが増大する人々さえいます。20年前の私は現在より、冷淡で、激しい性格でした。他の人々が無感覚になっていくのに、私の方は磨滅により女性化し、優しくなりました。そして、そのことが腹立たしいのです。自分が雌牛になるような気がします。些細なことに心を動かされます。あらゆることが私の心を乱し、動揺させます。あらゆることに私には葦に吹きつける激しい北風のようなのです。

あなたのひと言が思い出されて、私は今、『パースの美しい娘』***を読んでいます。

粹です。誰が何と言おうとも。この男は確かにある程度の想像力を持っています。

ではさようなら。私のことを考えてください。最上の愛情をあなたにお送りします。

あなたの

Gve. フロベール⁽⁸⁾

* アフロディーテ（とヴィーナス）の異名。

** パリにある養老院。

*** サー・ウォルター・スコット作（1828）。

〔手紙44〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

〔1867年1月27日〕

まあ！ おやおや、トラララ、アレアレ、私はもう病気ではありません。少なくとも、ほとんど病気ではありません。田舎の気が私を回復させ、辛抱強さか何かが、再び仕事をし、産み出そうと望ませています。私の病気は何かですって？ 大したことはありません。どこも悪くはないのに、原因の分からない、貧血と呼ばれるもの、崩落の気配がここ数年来感じられていたのですが、クロワッセから帰って後、パレゾーではっきりしたのです。尋常とは言えない急激なやせ方、遅すぎ、また微弱にすぎる脈拍、調子のおかしい胃、そして息苦しさ^と無力感。数日の間、この哀れな胃はコップ一杯の水も受けつけることができず、このことが私を打ちのめし、ほとんど治る見込みがないように思われました。けれども、すべてが元通りになり、昨日からは仕事さえしています。

大切なあなたの方は、雪のなかを夜半に散歩なさっている。たまの外出にしてはこれは相当に常軌を逸しています。あなたをも病気にしかねませんよ。私があなたにお勧めしたのは月ではなく、太陽ですよ。私達はフクロウではありませんからね。こちらでは3日ほど春の陽気に恵まれました。ことのほか美しく、私が大好きな、私にとって大切な果樹園へあなたは登られなかったにちがいありません。私の思い出としてだけであれ、あなたは好天の日は毎日、正午にお登りになるべきです。その後、仕事は一層よどみなく進み、費やした時間どころかそれ以上を取り戻しますよ。

ところであなたには金銭上の心配がおありなのですか？ 私は、この世にもはや何ひとつ持たなくなつて以来、それがどんなものだから分からなくなりました。私は^{プロレタリア}労働者のように、その日その日の仕事で暮らしています。一日の仕事がもうできなくなれば、私はあの世に向けて梱包されるでしょうし、そのときはもう何も必要としないでしょう。

けれども、あなたの方は生きていかななくてはなりません。いつも欺かれたり、食べ物にされているとすれば、どうやって文筆で暮らしていけましょう？ 身を守る方法をあなたにお教えするのは私ではありません。あなたのために行動することのできる友人をお持ちではありませんか？ ああ！ 確かに、この点に関しては、世の中は急速に進んでいます。先日、私はあなたのことを非常に親しい友人に話し、今ではすっかり稀になってしまった芸術家の姿を描いてみせ、生活の物質的側面を考えなければならないことをのろいました。この友人からの手紙の最後の一葉を同封します。あなたがほとんど予期していなかった友人のいることがお分かりになりますよ。そして、その署名を目にしてあなたはきっとびっくりなさることでしょう。

いいえ、カンヌには行きません。強く心を引かれてはいるのですが。昨日、花を一杯に詰めた小さな箱を受け取りました。花は5、6日前、露地で切ったものでした。というのも、パリ、そしてパレゾーから転送されて来たからです。花々は素晴らしく新鮮で、かぐわしい香りを放ち、大変美しいのです。ああ！ 太陽の国に向けて出発、直ちに出発。でも私にはお金がありません。それに、時間がありません。私の病気が仕事を遅らせ、延期させたのです。ここに留まっています！ 私は元気ではありませんか？ もし来月、私がパリに行くことができなければ、私に会いにこちらにいらっやいませんか？ そうですとも、8時間の道中です！ この古びた住居をご覧にならないわけにはいきません。あなたは私に1週間の借りがあります。お出でにならないければ、私にそれを返そうとしない太った恩知らずを愛していると思うことになりますよ。

気の毒なサント＝ブーヴ！ これまで大きな悲しみに遭遇することもなく、金銭的な心配ももはやない彼ですが、私達より不幸ですね。そして、彼が考えていたように考えれば人生で最も惜しむに値しないもの、最も真剣でないものを惜しんでいるのです！ それに、非常に尊大です。ジャンセニストであった彼の熱意は冷めました。知性がおそらく開花したのでしょう。けれども、知性は私達を生き長らえさせるのに十分ではありません。それは私達に死に方を教えてはくれません。あれほどずっと前から、人事不省になることを絶えず予想しているバルベスは、穏やかで微笑を絶やすことはありません。死が私達から彼を引き離すことになるとは彼にも、彼の友人達にも思われないほどです。完全に死ぬ人間とは、これで終わってしまうと信じて、人が自分について来られるように、また、再び自分と一緒にになれるように手を差しのべることを誰にもしない人間です。

さようなら、心の友。上演を告げる鐘が鳴っています。モーリスが今晚、マリオネットで私達を楽しませてくれます。ひどく愉快なものです。芝居は真実、面白いですね！ 芸術家達の傑作です。どうしてあなたがいないのでしょう！ 愛している人々と隣同士で暮らせないのはばかげています⁽⁹⁾。

ここに言及されたバルベスに、G・フロベールはたとえば、2月28日付の姪のカロリーヌへの手紙、あるいは、3月2日付のG・サンドへの手紙で明言しているように⁽¹⁰⁾、この時期とりわけ専念していた『感情教育』の時代背景をなす〈48年の革命〉の証人として大きな関心を抱き、やがて、G・サンドを介して、証言を求めることになる。

〔手紙45〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ

〔1867年2月6日〕水曜日

昨日、御息の著書*を落手いたしました。多分、それより面白くない書物から解放されましたら、読み始めるつもりです。とりあえずお礼をお伝え下さい、大切な先生。

まず、あなたのことをお話しいたしましょう。「貧血について」です！ 鉄分を飲み、散歩し、眠ることが必要です。そして、なんとしてでも、南仏に行くこと！ そうです！ さもなければ、木でできた女は壊れてしまいましょう。お金は見つけられるものですし、時間は奪い取るものです。あなたは私が勧めることをやはり、ちっともなさいません。だが、あなたの方が間違っておられます。そのことが私を深く悲しませるので

す。

いいえ！ 私には金銭上の心配と呼ばれるものはありません。私の収入は非常に限られたものですが、確実です。ただ、あなたの友人にはその収入を当てにして先に遣ってしまう癖があるので、ときどき不如意になるのです。そして、「書斎の沈黙のなかで」ぶつぶつ不平を言うのです。だが、よそでは、そんなことはしません。とてつもない混乱が生じない限り、私の人生の終わりまで食と暖を欠くことはないでしょう。私の相続人達は金持ちであり、あるいは、将来、そうなりましょう（家族のなかの貧者は私ですから）。まったく、いまましい！

私のペンでお金を稼ぐことについては、私にはその能力がまるでないことが分かっていますから、そうした自負を持ったためしはありません。ですから、田舎のささやかな金利生活者として暮らさなければなりません。これは並外れて愉快的ことではありません。しかし、私より立派な多くの人々が地所を持っていないのですから、不満を言うのは間違いでしょう。それに、神を非難するのは、あまりにありふれた偏執ですから、ただ単に上品であるためにも慎むべきです。

「金銭」についても一言。これはわれわれ2人の間だけの話にしてください。私はパ

りに行けば、つまり、今月の20日から23日にですが、あなたがカンヌにお出かけになるのに必要とされるのであれば、なんの差支えもなく1,000フランをお貸しすることができます。ブイエか他の親しい仲間にするように、あなたにこの申し出を率直にしています。ご遠慮には及びません！ そうでしょうか？ 社交界の人士の間ではこんなことは礼儀にかなってはいないでしょう。私にもそれはよく分かっています。しかし、吟遊詩人同士は多くのことを許し合うものです。

ノアンにお伺いするよう、招いてくださって本当にありがとうございます。お伺いしますとも。あなたの家を是非とも拝見したいからです。あなたのことを考えるとき、あなたの家を知らないことに困惑してしまうのです。しかし、この楽しみは今度の夏まで延期しなければなりません。今のところ、パリにしばらくいる必要があるのです。やりたいこと全てを仕上げるのに3か月はみっちりかかります。

優しいバルベスの一葉をお返しします。彼の真実の伝記について、私は非常に不十分にしか知りません。彼について知っているのは、彼が誠実で、英雄的な人間だということだけです。彼の好意への感謝の気持ちとして、私からの握手を彼にお伝えください。

ここだけの話ですが、彼は勇敢であると同時に聡明でしょうか？ この世界の人々が私に対して少しばかり率直になってくれることが今の私には必要なのです。というのも、48年の革命を調べ始めるところなのです。

ノアンのあなたの書庫のなかから私のために、1. 陶器に関するあなたの文章 2. 聖母マリアを主題とした、イエズス会のX神父の小説、を探すと私に約束してくださいました。

それにしてもイエズス会士でも童貞でもないブーヴ翁に対する何という厳しさでしょう！ 「彼が考えていたように考えれば、最も惜しむに値しないものを」彼は惜しんでみると、あなたはおっしゃいます。どうしてそうなのですか？ すべては人がそのことに取り組む激しさにかかっていますね？ 私にはあなたが結局は（この領域においては）カトリック教義におかされているように思われます、おお、大切な先生。男達はいつの世でも、生涯の最も真剣事は享樂することなり、と考えるものです。「女性」はわれわれすべてにとって、無限への「オジーヴ」なのです。こうしたことは高尚ではありません。しかし、これが「男達」のありのままの本質です。このことについて人々は法外にほらを吹いていますよ！ 「文学」にとって、ありがたいことに。「個人の幸福」にとっても、ではありませんか？ どちらでも大したことではありません！ ヴィーナスに栄光あれ！

グラソーよろしく言うべきです。

「いいところがあるさお婆さん！ さあ！ さあ！」

「官能の錯乱を試してみよう！
私に花の冠をかぶせておくれ！
私の堅琴を持ってきておくれ！
ブドウ酒があふれでるように！
私の足が得も言われぬ芳香を踏みしだくように！」
(ドリール神父)

ああ！ 先程はあなたのいらっしゃらないことがひどく残念でした。潮が見事でした。風がとどろき、河は白く泡立ち、あふれています。まるで大洋のようで、いい気持ちにしてくれます。

さようなら。あなたを愛しているように、優しく抱擁いたします。

Gve. フロベール⁽¹¹⁾

* 『金髪の伊達男』

〔手紙46〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

〔18〕 67年2月8日

いいえ、私はカトリック教徒ではありません、でも醜悪さは追放します。若い娘を買う醜い老人は愛の行為をするのではないということ、そこにはシプリスも、オジーヴも、無限も、男も女もないということを私は言っているのです。倒錯的なものがあります。つまり、若い娘を醜い老人の腕のなかに押しやるのは欲望ではありません。自由と相互性がない場合、それは神聖な本性を侵害するものです。したがって、彼が、若い娘達が自分の身を惜しむだろうと思うのでない限り、彼が惜しんでいるものは哀惜すべきものではありません——それに、あなたにおたずねしますが、彼女達は恥知らずな給金以外のものを惜しんだりするのでしょうか？ これがああ偉大で、素晴らしい精神、他のすべての点であればほどまでに明晰で、思慮深い精神の墮落でした。愛している人々をその敵から守らなければならないときには、人はすべてを容認するものです。けれども、私達2人の間で話していることを葬り去った上で、悪徳が私の長年の友をすっかり墮落させたあなたに言うことができますよ。

私達がまじめに愛しあっていることを信じなくてはなりません。大切な仲間。2人も同時に同じことを考えたのですから。あなたは私にカンヌに行くための1,000フラン

を申し出てくださる、私と同様、素寒貧のあなたが。そして、あなたが金銭上の問題で困っていると書いてこられたとき、私は2,000フランに達する有り金の半分をあなたに申し出ようと思って、いったん封をした手紙を開けました。それは私の蓄えです。結局、私には申し出ることができませんでした。なぜ？ 本当にばかげたことです。あなたは私よりすぐれていらっしやった、あなたは実際、事情に通じておられた。ですから、このご親切な考えに対してあなたを抱擁いたします。そして、お受けすることはいたしません。けれども、他の方策がなければ、きっと、お受けすることでしょう。とはいえ、私にお金を貸すべき人がいるとすれば、それは、私の小説で大邸宅と土地を購入したビュロ殿ですよ。拒みはしないでしょ。私に提供さえすることでしょう。ですから、必要となれば、彼から受け取りましょう。でも、私は出発できる状態にありません。最近、病気がぶり返したのです。私は打ちのめされて、36時間、眠り続けました。今は起きていますが、衰弱しています。正直なところ、生きたいと望む気力がないのです。執着がありません。惨めな生活を繰り返すために、快適な場所から出かけ、新たな疲労を探し求め、大変な苦勞をするのは、少々ばかげていると思うのです。まだ人を愛し、まだ人から愛され、誰とも反目しておらず、自らに不満もなく、そして、かなり若々しい想像力を必要とすることですが、あの世での素晴らしいことを夢みながら、この世から立ち去るのはどんなにか甘美なことでしょうから。

それにしても、陰うつだと思われている事柄についてなぜあなたにお話しするのか自分でも分かりません。私はそうした事柄を穏やかに思い描くことにすっかり慣れてしまいました。人生の盛りにいる人々には痛ましいものに思われるということを私は忘れていました。もうこのことについて語るのはやめましょう。春がきっと私に再び仕事に取りかかる欲望を吹き込んでくれることでしょう。腰を下ろすようにと私に命じる内なる声にも、歩けと命じる声にも同じように素直に従いましょう。

聖母マリアを題材とした小説をあなたに約束したのは私ではありません。少なくともそうは思いません。陶器についての私の文章は見つかりません。ですから、最後の紙片を補足なさるのであれば、作品集のどの巻かの末尾に印刷されていないかどうかご覧ください。『ジョヴァンニ・フレツパ』か、『マジョリカ陶器』*という題でした。

ああ！！　なんて運がいいのでしょうか！　こうしてあなたに書いているとき、まだ探していなかった一隅を思い出したのです。急いでそこに行き、そして見つけました！　私の文章よりはるかによいものを見つけました。3冊の書物をお送りします。あなたを私と同じくらい博学にしてくれることでしょう。パッセーリの本は魅力的です。

バルベスは優れた知性の持ち主です。確かに！　けれども、砂糖の塊のようです。卓越した頭脳、穏やかで、めったに見られないほどの直視力を備えた、インディアンのよ

うな頭部。形而上的考察のすべてが直観となり、あらゆるものを支配する情熱となっています。したがって、その性格に比敵させうるのはガリバルディの性格を措いてありません。道德にかない、完璧であることで信じられないほどの人物。フランスでは直ちに役立てることのできない、並外れた能力。異なった時代、あるいは異なった国であれば英雄になったのに、彼には力を発揮する場が欠けていたのです。それでは、さようなら。おやまあ、私は子牛^{ゾー}ですね！ あなたが倦怠の日々にご自分に与えた雌牛^{ヴァシユ}の称号を残してさし上げましょう。やはり、あなたがいつパリにいらっしゃるのか教えてください。多分、私も所用で何日か行かなければならないでしょうから。抱擁しあいましょう。それから、今年の夏はノアンにいらっしゃいますね。合意されたことですよ、絶対に！

母上と美しい姪ごさんによろしくお伝えください。

3冊の仮綴本をお受け取りになったらどうぞお知らせください。多大な損失ですから⁽¹²⁾。

* 論文『フィレンツェのマジョリカ陶器とジョヴァンニ・フレッパ』は1855年7月5日の「ラ・プレス」紙に掲載された。

〔手紙47〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

〔1867年〕3月4日

大切な友、

あなたの心の友である老吟遊詩人は、至って健康な男性を10,000人集めた位元気で、とても陽気です。というのも再び太陽が輝いていますし、原稿がはかどっているからです。老吟遊詩人は息子のデュマの戯曲のために多分、近々パリに出かけます。そこで一緒にになれるよう努めましょう。

〔……〕

あなたはパリで楽しんでいますか？ クロワッセにいらっしゃるときと同じようにパリでも家にこもったままですか？ そうであれば、私があるに会いに行かない限り、パリであなたにはほとんどお目にかかれませんか。あなたが女性をお迎えにならず、60の^{よわい}齢を重ねた吟遊詩人があなたのお邪魔にならない時間を私に教えてください。『カディオ』はすっかり作り直し、あなたに読んでお聞かせしたところまで書き直しました。前ほど劣悪ではありません。『モン＝ルヴェシュ』は戯曲にはしません。このことはいづれお話しいたしましょう。大層面倒なことですから。

あなたを愛しています。心から抱擁いたします。

あなたの年老いた

ジョルジュ・サンド

お送りした陶器についての仮綴本は届いたでしょうか？ 受け取られたことをまだ知らせてくださっていません。あなたからの一番最近の手紙が届いた翌日、クロワッセにお送りしたのです⁽¹³⁾。

[手紙48] フロベールよりサンドへ

パリ

[1867年3月5日] 火曜日4時

あなたがお元気でいらっしゃる事が分かり、私はうれしくてなりません。しかし、二度とお仕事で疲労困憊なさったり、ご自分のことを「木でできた女」などとお思いになってはなりません。

陶器に関する仮綴本を受け取った旨、あなたにお知らせしていたと思っておりました。まことに申し訳ありません、大切な先生。

もちろんです、私の家をお訪ねくださることを心待ちにしております！ 「女性」がもたらしかねない混乱に、他の人と同様、あなたがお気づきになることはありません。(確かです)。「心」や「官能」にかかわる取るに足らない話は奥の部屋から持ち出されることはありません。それにしても、私の界限からあなたの所までは遠いし、あなたが無駄足を運ばれることになりかねませんから、パリにお着きになられ次第、会う約束をしてください。それから、差向かいで、テーブルに両ひじをつけて夕食をとるためにもう一度お会いしましょう。

ブイエにあなたからの情愛のこもった手紙を送りました。こんな時間に私の窓の下で飾り牛のしっぽに押し寄せている民衆にうんざりしています！ そして、人々は「精神」が街中を駆け回ると言うのですから！！

さようなら、近いうちに！ あなたとの再会をこれほど望んでいるのは変です！ あなたを非常に強く抱擁します。

あなたの年老いた

Gve. フロベール⁽¹⁴⁾

《あなたの老吟遊詩人はまた病床に伏していました。絶えず、その古いギターは壊れてしまうおそれがあります。彼は48時間眠り、治りました——でも、衰弱しています。予定していたように、16日にパリに行くことはできないでしょう。》⁽¹⁵⁾（3月14日付）こうした、G・サンドの体の不調を伝える言葉が次第に頻繁に繰り返されるようになり、G・フロベールはそれに深く心を痛めながらも、眼前にするおぞましい現実への憤りを伝えずにはいられない。

〔手紙49〕 フロベールよりサンドへ

パリ

〔1867年4月13日〕土曜日

大切な先生。

あなたは本当に、どこかへ太陽に会いにお出かけになるべきです。絶えず体調がすぐれないのはばかげていますよ。ですから、旅行なさるがいい！ 休養なさるがいい！ 諦めは美德のなかで最悪のものです。

もっとも、耳にするあらゆる愚劣を堪え忍ぶために私には諦めが必要です！ どれほどの事態になっているのか、あなたには想像がおつきにならないでしょう。（シャルル6世治下のように）ときどきサン＝ギー舞踏病に取りつかれたフランスは、今では脳が麻痺しているように私には見えます。だれもが恐怖でばかになっています。つまり、プロシャに対する恐怖、ストライキへの恐怖、「順調に進まない」博覧会への恐怖、あらゆることに対する恐怖です。これほどまでの愚劣さを見出すには1849年までさかのぼらなければなりません。

この前のマニー亭での食事では、まるで門番同士のような会話が交わされましたから、私は心の中で、二度と足を踏み入れまいと自分に誓いました。終始、ビスマルク氏とリュクサンブールのことでした！ 私はまだその話題で満腹している有様です！ そのうえ、私は易々と生きていく気分にはなりません！ 私の感受性は鈍るところか、研ぎ澄まされています。どうでもいいようなたくさんの方が私を苦しめるのです。私のこの弱点をお許してください。かくも「強く」寛大なあなた！

小説はまったく進みません。48年の新聞を読むことに没頭しています。セーヴルやクレリュなど何度か出かけなければなりません（そして、その用がまだ終わっていないのです）。

サント＝ブーヴ翁は、定期刊行物に関する法律のことで、上院で朗読する「自由思想」

についての演説を準備しています。彼は、ご存じのとおり、果敢な人間でした。

[……]

もちろん私はノアンに伺います。あなたはいつパリにお戻りですか？

愛をこめて

あなたの

Gve. フロベール⁽¹⁶⁾

[手紙50] フロベールよりサンドへ

パリ

[1867年5月6日] 月曜日夜

あなたからの便りがないので寂しく思っています。大切な先生！ どうなっておしまいです？ いつお目にかかれるのです？

私のノアンへの旅行は中止になりました。次のような理由からです。母が1週間ほど前に、軽い発作を起こしました。なんでもないのですが、再発しかねません。母は私がいなことを寂しがっていますから、クロワッセへの出発を早めるつもりです。もし母が8月頃元気になり、心配がなくなりましたら、私が大急ぎであなたのお住まいに向かうことは申し上げるまでもありません。

[……]

今日はマニー亭の日ですが、最良の人々が欠けていますから、私は行きません。

戦争のうわさが鎮まって以来、人々のばかき加減が少しばかり減じたように私には思われます。民衆の卑劣さが私に与えていた嫌悪感がおさまっています。

私は2度、博覧会へ出かけました。圧倒的な規模です。壮麗な、また、非常に珍しいものが出品されています。しかし、人間は無限を一度に飲み込むようには作られていません。シャン・ド・マルス*で目にするすべてのものに関心を抱くには、あらゆる科学、あらゆる芸術を心得ている必要があります。それでも、3か月まるまる時間があり、毎朝、会場へ出かけてメモを取るような人間は、多くの読書と多くの旅行をせずにすみましょう。そこでは、パリから非常に遠く離れた、新しく、醜い世界、おそらく未来の世界である巨大世界にいるような気がします。そこで初めて食事をしたとき、私はずっとアメリカのことを考え、黒人の言葉をしゃべりたくなりました。

ところで、私は2週間後にクロワッセに戻ります。パリの滞在は3か月になりますが、いつものとおりやり遂げたかったことのほぼ15分の1をやりました。

モーリスによろしくお伝えください。愛情をこめてあなたを抱擁いたします。

あなたの年老いた

Gve. フロベール⁽¹⁷⁾

* 万国博覧会会場。

そして、G・サンドもまた——かつて、幾度となく、自らの楽天的性向を明言し、たとえ理想とする〈完成〉にはほど遠い、醜悪な現実には直面しようとも、ほとんどたじろぐことなく、人類の明日への確実な歩みを疑うことのなかったG・サンドもまた、蘇生力を喪失し、病的症状を呈し始めた文明社会に対する諦観に次第に包まれてゆくように思われる。

たとえば、1848年2月の共和国樹立の朝、バリケードの残るパリの街を駆け回り、革命を推進させたパリの民衆に熱狂的賛辞を惜しみなく送ったG・サンドを想起させる言葉を手紙の中に見出すことは難しい。

〔手紙51〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

〔18〕 67年5月9日

親愛なる心の友。

私は元気です。仕事をしています。『カディオ』を完成させています。暑くなりました。私は生きています。穏やかで——そしてどうしてだかほとんど分かりませんが、悲しい気持ちでいます。ここで送っている、かくまでも単調で、静かで、そして快適な暮らしのなかで、肉体的には丈夫になりますが、精神的には弱くなる環境にいます。そして私は蜜とバラの憂うつに落ちこんでいます。憂うつであることには変わりありません。私が愛したすべての人々が私のことを忘れてしまい、そして、それも当然なことだと思われるのです。そうした人々のためにできることはもう何もなくて、自分本位に生きているからです。私は莫大な献身に生きてきました。それは私に重くのしかかり、私の能力を超え、しばしばのろわしくさえ思われました。そして今、従事することがもはやなくなり、元気でいることにうんざりしているのです。もし人類が非常にうまく、あるいは非常に悪く進んでいけば、人々は社会全体の利益に結びつけられ、幻想であれ、知恵であ

れ、1つの考えを生きることでしょう。けれども、精神がどういう状態に達しているか、小心者達に対して激しく抗議の声を上げているあなたにはよくお分かりです。こうした状況は消え去るでしょうか？ そうだとしても、それは繰り返すためにすぎません！ 明日が嵐をもたらすかもしれないからといって、発展の真っ最中に麻痺してしまう社会とは何でしょう？ 危険の想像がそのような気力喪失を引き起こしたことはかつて一度としてありません。われわれの消化を乱すものは何もないと自分に断言しながら食べるよう自分自身に懇願しなければならないほど、私達は墮落してしまったのでしょうか？ 確かに、それはばかげています。恥ずかしいことです。それは安寧の結果でしょうか？ 文明はわれわれをこのような病的で、意気地のない利己主義に押しやるのでしょうか？ われわれの楽観主義は近頃、大きな打撃を受けました。

[……] (18)

[手紙52] フロベールよりサンドへ

パリ

[1867年5月10日] 金曜日、朝

今度の月曜日、母のもとへ帰ります。今からそのときまであなたにお会いできる望みはほとんどありません！ しかし、パリに出ていらっしゃるとき、どうしてクロワッセまで足を伸ばせないことがありましょ。そこではみんながあなたを熱愛しています。私を含めて！

サント＝ブーヴは専門医の診療を受け、本気で治療を受けることにやっと同意しました。したがって良くなっています。元気を取り戻しました。

ブイエの地位は彼に4,000フランの年棒と住居を与えます。今や彼は生計を立てることを考えずにすみませ。これこそが真のぜいたくです。

人々は戦争の話をしなくなりました。何の話もしなくなりました。博覧会だけが「すべての人間の関心事」であり、辻馬車の御者がすべてのブルジョアを激怒させています。仕立て職人達のストライキの間、彼等(ブルジョア)はまったく見事でした。今にも「社会」が崩壊するような有様でしたよ。

格言。「ブルジョア」への憎悪は美德の始まりである。私はこの「ブルジョア」という語のなかに作業服を着たブルジョアも、フロックコートを着たブルジョアと同じ様に含めています。「民衆」であるのは、より正確に言うならば、「人類」の伝統であるのは、われわれです。われわれだけ、つまり、教養のある者だけなのです。

おっしゃるとおり、私は自分の利害とは関係のない怒りを持つことができます。あなたがそのために私を愛してくださるので、私はあなたをいっそう愛します。愚劣さと不正に私は叫び声を上げます。そして、私は家に閉じこもったままで、「私に関わりのない」多くの事柄に対してどなっているのです。

一緒に暮らせないのはなんと悲しいことでしょう、大切な先生！ 私はあなたと知り合いになる前にはあなたに敬服していました。あなたの美しく、善良なお顔に接したその日から、私はあなたを愛してまいりました。こういうことです！ ですから、あなたを非常に強く抱擁します。

あなたの年老いた

G・F

陶器に関する仮綴本の小包をフィヤンティーン街の方へお届けします。

モーリスに心をこめた握手を。オロール嬢の4つの頬に口づけを⁽¹⁹⁾。

[手紙53] サンドよりフロベールへ

ノアン

[18] 67年5月30日

{……}

あなたにさようならを言いたくありません。代りに、できるだけ早く、^(オ・ルヴ・オ・ワール)ではまたを。私はあなたを大いに、大いに愛しています。私の大切なあなた、そのことはご存じですね。理想はあなたのように、優しく、大きな心を持って長く生きることでしょう。そうであれば人は死ぬことをもはや望みはしないでしょう。それでも、私のように、実際に年老いたときは、あらゆることに準備ができていなければなりません。

{……}

G・サンド⁽²⁰⁾

—— 続 ——

〈注〉

使用したテキストは以下の版である。

—*George Sand Correspondance*

(édition de Georges Lubin, Classiques Garnier, 1964-1995)

—*Gustave Flaubert Correspondance*

(édition du Club de l'Honnête Homme, 1975)

—*Correspondance Flaubert-George Sand*

(édition d'Alphonse Jacobs, Flammarion, 1981)

1. ex. Huguette Bouchardeau, *George Sand, la lune et les sabots* (Ed. Robert Laffont, 1990)

2. 拙稿「ジョルジュ・サンドーギュスターヴ・フロベール往復書簡を読む (I)」

(九州産業大学国際文化学部紀要, 第7号, 1996年11月)

「ジョルジュ・サンドーギュスターヴ・フロベール往復書簡を読む (II)」

(九州産業大学国際文化学部紀要, 第8号, 1997年3月)

3. 前掲論文 (「ジョルジュ・サンドーギュスターヴ・フロベール往復書簡を読む (I)」)

4. Eh bien, chère maître ? Qu'est-ce que ça veut dire ? Votre lettre est-elle égarée ? Je n'ai pas de vos nouvelles depuis longtemps. Je m'ennuie de vous, et je suis inquiet de vous, voilà. La dernière fois que vous m'avez écrit, vous étiez malade ? L'êtes-vous encore ? Je ne sais si vous êtes à Nohant, à Palaiseau ou à Paris ?

Je vous embrasse, en attendant quelques lignes de votre chère écriture.

Votre vieux. (ed. Club de l'Honnête Homme, tome 14, p. 320)

5. Cher camarade, Ton vieux troubadour a été tenté de claquer. Il est toujours à Paris. Il devait partir, le 25 janvier (*sic pour* décembre), sa malle était bouclée, ta 1^{re} lettre l'a attendu tous les jours à Nohant. Enfin le voilà tout à fait en état de partir et il part demain matin avec son fils Alexandre, qui veut bien l'accompagner.

C'est bête d'être jeté sur le flanc et de perdre pendant trois jours la notion de soi-même et de se relever aussi affaibli que si on avait fait quelque chose de pénible et d'utile. Ce n'était rien, au bout du compte, qu'une impossibilité momentanée de digérer quoi que ce soit, froid, ou faiblesse, ou travail, je ne sais pas. Je n'y songe plus guère, S(ain)te-Beuve inquiète davantage, on a dû te l'écrire. Il va mieux aussi, mais il y aura infirmité sérieuse, et à travers cela des accidents à redouter. J'en suis toute attristée et inquiète.

Je n'ai pas travaillé depuis plus de 15 jours. Donc ma tâche n'est pas avancée, et comme je ne sais pas si je vas être en train tout de suite, j'ai donné *campo* à l'Odéon. Ils me prendront quand je serai prête. Je médite d'aller un peu au Midi quand j'aurai vu mes enfants. Les plantes du littoral me trottent par la tête. Je me désintéresse prodigieusement de tout ce qui n'est pas mon petit idéal de travail paisible, de vie champêtre et de tendre et pure amitié. Je crois bien que je ne dois pas vivre longtemps, toute guérie et très bien que je suis. Je tire cet avertissement du grand calme, *toujours plus calme*, qui se fait dans mon âme jadis agitée. Mon cerveau ne procède plus que de

la synthèse à l'analyse ; autrefois c'était le contraire. A présent ce qui se présente à mes yeux, quand je m'éveille, c'est la planète ; j'ai quelque peine à y retrouver le *moi* qui m'intéressait jadis et que je commence à appeler *vous* au pluriel. Elle est charmante, la planète, très intéressante, très curieuse, mais pas mal arriérée et encore peu praticable, j'espère passer dans une oasis mieux percée et possible à tous. Il faut tant d'argent et de ressources pour voyager ici ! et le temps qu'on perd à se procurer ce nécessaire est perdu pour l'étude et la contemplation. Il me semble qu'il m'est dû quelque chose de moins compliqué, de moins civilisé, de plus naturellement luxueux et de plus facilement bon que cette étape enfiévrée. Viendras-tu dans le monde de mes rêves, si je réussis à en trouver le chemin ? Ah ! qui sait ?

Et ce roman, marche-t-il ? Le courage ne s'est pas démenti ? La solitude ne te pèse pas ? Je pense bien qu'elle n'est pas absolue et qu'il y a encore quelque part une belle amie qui va et vient, ou qui demeure par là. Mais il y a de l'anachorète quand même dans ta vie, et j'envie ta situation. Moi je suis trop seule à Palaiseau avec un mort ; pas assez seule à Nohant, avec des enfants que j'aime trop pour pouvoir m'appartenir, —et, à Paris, on ne sait pas ce qu'on est, on s'oublie entièrement pour mille choses qui ne valent pas mieux que soi. Je t'embrasse de tout cœur, cher ami, rappelle-moi à ta mère, à ta chère famille, et écris-moi à Nohant, ça me fera du bien.

Les fromages ? Je ne sais plus, il me semble qu'on m'en a parlé mais je ne souviens plus. Je te dirai ça de là-bas. (ed. George Lubin, tome XX, pp. 285-286)

6. Non, chère maître, vous n'êtes pas près de votre fin. Tant pis pour vous, peut-être. Mais vous vivrez vieille et très vieille, comme vivent les géants, puisque vous êtes de cette race-là ; seulement, il *faut* se reposer. Une chose m'étonne, c'est que vous ne soyez pas morte vingt fois, ayant tant pensé, tant écrit, et tant souffert. Allez donc un peu, comme vous en avez envie, au bord de la Méditerranée. L'azur détend et retrempe. Il y a des pays de Jouvence, comme la baie de Naples. En de certains moments, ils rendent peut-être plus triste ? Je n'en sais rien.

La vie n'est pas facile ! Quelle affaire compliquée et dispendieuse ! J'en sais quelque chose. Il faut de l'argent pour *tout* ! si bien qu'avec un revenu modeste et un métier improductif, il faut se résigner à *peu*. Ainsi fais-je ! Le pli en est pris ; mais les jours où le travail ne marche pas, ce n'est point drôle. Ah ! oui, ah ! oui ! je veux bien vous suivre dans une autre planète. Et à propos d'argent, c'est là ce qui rendra la nôtre inhabitable dans un avenir rapproché, car il sera impossible d'y vivre, même aux plus riches, sans s'occuper de *son bien* ; il faudra que tout le monde passe plusieurs heures par jour à tripoter ses capitaux. Charmant ! Moi, je continue à tripoter mon roman, et je m'en irai à Paris quand je serai à la fin de mon chapitre, vers le milieu du mois prochain. Il continue son petit train. Je sculpte laborieusement mon coco, comme un forçat : en étant un moi-même (mais assez triste), pas forçat, mais coco.

Et quoi que vous en supposiez, «aucune belle dame» ne vient me voir. Les belles dames m'ont beaucoup occupé l'esprit, mais m'ont pris très peu de temps. Me traiter d'anachorète est peut-être une comparaison plus juste que vous ne croyez.

Je passe des semaines entières sans échanger un mot avec un être humain, et à la fin de la semaine il m'est impossible de me rappeler un seul jour, ni un fait quelconque. Je vois ma mère et ma nièce les dimanches, et puis c'est tout. Ma seule compagnie consiste en une bande de rats qui font dans le grenier, au-dessus de ma tête, un tapage infernal, quand l'eau ne mugit pas et que le

vent ne souffle plus. Les nuits sont noires comme de l'encre, et un silence m'entoure, pareil à celui du désert. La sensibilité s'exalte démesurément dans un pareil milieu. J'ai des battements de cœur pour rien chose compréhensible, du reste, dans un vieil hystérique comme moi. Car je maintiens que les hommes sont hystériques comme les femmes et que j'en suis un. Quand j'ai fait *Salammbô*, j'ai lu sur cette matière-là «les meilleurs auteurs» et j'ai reconnu tous mes symptômes. J'ai la boule et le clou à l'occiput. Tout cela résulte de nos jolies occupations. Voilà ce que c'est que de se tourmenter l'âme et le corps. Mais si ce tourment-là est la seule chose propre qu'il y ait ici-bas ?

Je vous ai dit, n'est-ce pas, que j'avais relu *Consuelo* et *La Comtesse de Rudolstadt* ; cela m'a pris quatre jours. Nous en causerons très longuement, quand vous voudrez. Pourquoi suis-je «amoureux» de Liverani ? C'est que j'ai les deux sexes, peut-être ?

Ah ! vous m'aviez promis de me retrouver à Nohant un article sur les faïences. S'il vous tombe sous la main, envoyez-le moi.

Faites pour moi une révérence à madame votre belle-fille, donnez une poignée de main à votre fils, baisez sur ses quatre joues Mlle Aurore. Et quant à vous, soignez-vous bien, un peu pour l'amour de votre vieux. (op. cit., pp. 322-323)

7. Me voilà chez nous, assez valide, sauf quelques heures le soir. Enfin, *ça passera, le mal ou celui qui l'endure*, disait mon vieux curé, *ça ne peut pas durer*. Je reçois ta lettre ce matin, cher ami de mon cœur. Pourquoi que je t'aime plus que la plupart des autres, même plus que des camarades anciens et bien éprouvés ? Je cherche, car mon état, à cette heure c'est d'être

Toi qui vas cherchant

Au soleil couchant

Fortune ? . . .

Oui, fortune intellectuelle, *lumière* ! En bien, voilà : on se fait, étant vieux, dans le soleil couchant de la vie, —qui est la plus belle heure des tons et des reflets, —une notion nouvelle de toutes choses et de l'affection surtout. Dans l'âge de la puissance et de la personnalité on tâte l'ami comme on tâte le terrain, au point de vue de la réciprocité. Solide on se sent, solide on veut trouver ce qui vous porte ou vous conduit. Mais quand on sent fuir l'intensité du *moi*, on aime les personnes et les choses pour ce qu'elles sont par elles-mêmes, pour ce qu'elles représentent aux yeux de votre âme, et nullement pour ce qu'elles apporteront en plus à votre destinée. C'est comme le tableau ou la statue que l'on voudrait avoir à soi quand on rêve en même temps un beau chez-soi pour l'y mettre. Mais on a parcouru la verte Bohême sans y rien amasser, on est resté gueux, sentimental et troubadour. On sait très bien que ce sera toujours de même et qu'on mourra sans feu ni lieu. Alors on pense à la statue, au tableau dont on ne saurait que faire et que l'on ne saurait où placer avec honneur si on les possédait. On est content de les savoir en quelque temple non profané par la froide analyse, un peu loin du regard et on les aime d'autant plus. On se dit : Je repasserai par le pays où ils sont. Je verrai encore et j'aimerai toujours ce qui me les a fait aimer et comprendre. Le contact de ma personnalité ne les aura pas modifiés, ce ne sera pas moi que j'aimerai en eux.

Et c'est ainsi vraiment, que l'idéal qu'on ne songe plus à fixer, se fixe en vous parce qu'il reste *lui*. Voilà tout le secret du beau, du bon, *du seul vrai*, de l'amour, de l'amitié, de l'art, de l'enthousiasme et de la foi. Penses-y, tu verras.

Cette solitude où tu vis me paraîtrait délicieuse avec le beau temps. En hiver, je la trouve stoïque et suis forcée de me rappeler que tu n'as pas le besoin moral de la locomotion *à l'habitude*. Je pensais qu'il y avait pour toi une autre dépense de forces durant cette claustration—alors c'est très beau, mais il ne faut pas prolonger cela indéfiniment, si le roman doit durer encore, il faut l'interrompre ou le panacher de distractions. Vrai, cher ami, pense à la vie du corps qui se fâche et se crispe quand on la réduit trop. J'ai vu, étant malade à Paris un médecin très fou, mais très intelligent qui disait là-dessus des choses vraies. Il me disait que je me *spiritualisais* d'une manière inquiétante, et, comme je lui disais justement à propos de toi que l'on pouvait s'abstraire de toute autre chose que le travail, et avoir plutôt excès de forces que diminution, il répondait que le danger était aussi grand dans l'accumulation que dans la déperdition ; et, à ce propos, beaucoup de choses excellentes que je voudrais savoir te redire.

Au reste tu les sais, mais tu n'en tiens compte. Donc ce travail que tu traites si mal en paroles, c'est une passion et une grande ! Alors, je te dirai ce que tu me dis : pour l'amour de nous et pour celui de ton vieux troubadour, ménage-toi un peu.

Consuelo, la C[omte]sse de Rudolstadt, qu'est-ce que c'est que ça ? est-ce que c'est de moi ? Je ne m'en rappelle pas un traître mot ! Tu lis ça, toi ! est-ce que vraiment ça t'amuse ? Alors, je le lirai un de ces jours et je m'aimerai si tu m'aimes.

Qu'est-ce que c'est aussi que d'être hystérique ? Je l'ai peut-être été aussi, je le suis peut-être, mais je n'en sais rien, n'ayant jamais approfondi la chose et en ayant ouï parler sans l'étudier. N'est-ce pas un malaise, une angoisse causés par le désir d'un impossible *quelconque* ? En ce cas, nous en sommes tous atteints, de ce mal étrange, quand nous avons de l'imagination ; et pourquoi une telle maladie aurait-elle un sexe ?

Et puis encore, il y a ceci pour les gens forts en anatomie : *il n'y a qu'un sexe*. Un homme et une femme c'est si bien la même chose que l'on ne comprend guère les tas de distinctions et de raisonnements subtils dont se sont nourries les sociétés sur ce chapitre-là. J'ai observé l'enfance et le développement de mon fils et de ma fille. Mon fils était moi, par conséquent femme bien plus que ma fille qui était un homme pas réussi.

Je t'embrasse, Maurice et Lina qui se sont pourléchés de tes fromages, t'envoient leurs amitiés, [...]

Si je ne guéris pas ici, j'irai à Cannes, où des personnes amies m'appellent. Mais je ne peux encore en ouvrir la bouche à mes enfants. Quand je suis avec eux, ce n'est pas aisé de bouger. Il y a passion et jalousie, et toute ma vie a été comme ça, jamais à moi ! Plains-toi donc, toi qui t'appartiens ! (op. cit., pp. 294-297)

8. J'ai suivi vos conseils, chère maître, *j'ai fait de l'exercice* !!!

Suis-je beau, hein ?

Dimanche soir, à onze heures, il y avait un tel clair de lune sur la rivière et sur la neige que j'ai été pris d'un prurit de locomotion et je me suis promené pendant deux heures et demie, me montant le bourrichon, me figurant que je voyageais en Russie ou en Norvège. Quand la marée est venue et a fait craquer les glaçons de la Seine et l'eau gelée qui couvrait les cours, c'était, sans blague aucune, superbe. Alors j'ai pensé à vous et je vous ai regrettée.

Je n'aime pas à manger seul. Il faut que j'associe quelqu'un, l'idée de quelqu'un aux choses qui

me font plaisir. Mais ce quelqu'un est rare. Je me demande, moi aussi, pourquoi je vous aime. Est-ce parce que vous êtes un grand homme ou un *être charmant* ? Je n'en sais rien. Ce qu'il y a de sûr, c'est que j'éprouve pour vous un sentiment *particulier* et que je ne peux pas définir.

Et à ce propos, croyez-vous (vous qui êtes un maître en psychologie) qu'on aime deux personnes de la même façon ? et qu'on éprouve jamais deux sensations identiques ? Je ne le crois pas, puisque notre individu change à tous les moments de son existence.

Vous m'écrivez de belles choses sur l'« affection désintéressée ». Cela est vrai, mais le contraire aussi ! Nous faisons toujours Dieu à notre image. Au fond de tous nos amours et de toutes nos admirations, nous retrouvons *nous*, ou quelque chose d'approchant. Qu'importe, si *nous* est bien ! Mon *moi* m'assomme pour le quart d'heure. Comme ce coco-là me pèse sur les épaules par moments ! Il écrit trop lentement et ne pose pas le moins du monde quand il se plaint de son travail. Quel pensum ! et quelle diable d'idée d'avoir été chercher un sujet pareil ! Vous devriez bien me donner une recette pour aller plus vite ; et vous vous plaignez de fortune ! Vous !

Vous savez bien que vous ne [m']avez pas dit ce que vous aviez comme maladie ! Quoi ? Qu'est-ce ? Est-ce grave ? Allez-vous passer tout l'hiver dans le Midi ? Pas trop longtemps, hein ? Ce serait ennuyeux si on ne se voyait pas bientôt. Je serai à Paris dans un mois. Et vous ?

J'ai reçu de Sainte-Beuve un petit billet qui me rassure sur sa santé, mais qui est lugubre. Il me paraît désolé de ne plus pouvoir hanter les bosquets de Cypris ! Il est dans le vrai, après tout, ou du moins dans son vrai, ce qui revient au même. Je lui ressemblerai peut-être quand j'aurai son âge. Je crois que non, cependant. N'ayant pas eu la même jeunesse, ma vieillesse sera différente. Cela me rappelle que j'ai rêvé autrefois un livre sur Sainte-Périne. Le sieur Champfleury a traité ce sujet-là [en idiot]. Car je ne vois pas ce qu'il a de comique. Moi, je l'aurais fait atroce et lamentable. Je crois que le cœur ne vieillit pas ; il y a même des gens chez qui il augmente avec l'âge. J'étais plus sec et plus âpre il y a vingt ans qu'aujourd'hui. Je me suis féminisé et attendri par l'usure, comme d'autres se racornissent, et cela m'indigne. Je sens que je deviens *vache*. Il ne faut rien pour m'émouvoir. Tout me trouble et m'agite, tout m'est aquilon comme au roseau.

Un mot de vous, qui m'est revenu à la mémoire, me fait lire maintenant *La Jolie Fille de Perth*. C'est coquet, quoi qu'on en die. Ce bonhomme avait quelque imagination, décidément.

Allons, adieu. Pensez à moi. Je vous envoie mes meilleures tendresses.

Votre (op. cit., pp. 324-325)

9. Bah ! zut, troulala, aïe donc, aïe donc, je ne suis plus malade ou du moins je ne le suis plus qu'à moitié. L'air du pays me remet, ou la patience, ou *l'autre*, celui qui veut encore travailler et produire. Quelle est ma maladie ? rien. Tout en bon état, mais quelque chose qu'on appelle anémie, effet sans cause saisissable, dégringolade qui depuis quelques années menace, et qui s'est fait sentir à Palaiseau, après mon retour de Croisset. Un amaigrissement trop rapide pour être logique, le pouls trop lent, trop faible, l'estomac paresseux ou capricieux, avec un sentiment d'étouffement et des velléités d'inertie. Il y a eu impossibilité de garder un verre d'eau dans ce pauvre estomac durant plusieurs jours, et cela m'a mis[e] si bas, que je me croyais peu guérissable. Mais tout se remet et même depuis hier je travaille.

Toi, cher, tu te promènes dans la neige, la nuit. Voilà qui pour une sortie exceptionnelle est assez fou et pourrait bien te rendre malade aussi. Ce n'est pas la lune, c'est le soleil que je te

conseillais, nous ne sommes pas des chouettes que diable. Nous venons d'avoir trois jours de printemps. Je parie que tu n'as pas monté à mon cher verger qui est si joli et que j'aime tant. Ne fût-ce qu'en souvenir de moi tu devrais le grimper tous les jours de beau temps à midi. Le travail serait plus coulant après et regagnerait le temps perdu et au-delà.

Tu es donc dans des ennuis d'argent ? Je ne sais plus ce que c'est depuis que je n'ai plus rien au monde. Je vis de ma journée comme le prolétaire ; quand je ne pourrai plus faire ma journée, je serai emballée pour l'autre monde, et alors je n'aurai plus besoin de rien. Mais il faut que tu vives, toi. Comment vivre de ta plume si tu te laisses toujours duper et tondre ? Ce n'est pas moi qui t'enseignerai le moyen de te défendre. Mais n'as-tu pas un ami qui sache agir pour toi ? Hélas ! oui, le monde va à la diable de ce côté-là, et je parlais de toi l'autre jour à un bien cher ami, en lui montrant l'atriste, celui qui est devenu si rare, maudissant la nécessité de penser au côté matériel de la vie. Je t'envoie la dernière page de sa lettre tu verras que tu as là un ami dont tu ne te doutes guère, et dont la signature te surprendra.

Non, je n'irai pas à Cannes malgré une forte tentation. Hier, figure-toi que je reçois une petite caisse remplie de fleurs coupées en pleine terre, il y a déjà 5 ou six jours, car l'envoi m'a cherchée à Paris et à Palaiseau. Ces fleurs sont adorablement fraîches, elles embaument, elles sont jolies comme tout.—Ah ! partir, partir tout de suite pour les pays du soleil. Mais je n'ai pas d'argent et d'ailleurs je n'ai pas le temps. Mon mal m'a retardée et ajournée. Restons. Ne suis-je pas bien ? Si je ne peux pas aller à Paris le mois prochain, ne viendras-tu pas me voir ici ? Mais oui, c'est 8 h [eures] de route. Tu ne peux pas ne pas voir ce vieux nid. Tu m'y dois huit jours, ou je croirai que j'aime un gros ingrat qui ne me le rend pas.

Pauvre S[ain]-B[euve] ! Plus malheureux que nous, lui qui n'a pas eu de gros chagrins et qui n'a plus de soucis matériels. Le voilà qui pleure ce qu'il y a de moins regrettable et de moins sérieux dans la vie, entendu comme il l'entendait ! Et puis, très altier, lui qui a été janséniste son cœur s'est refroidi de ce côté-là. L'intelligence s'est peut-être développée, mais elle ne suffit pas à nous faire vivre et elle ne nous apprend pas à mourir. Barbès qui depuis si longtemps attend à chaque minute qu'une syncope l'emporte, est doux et souriant. Il ne lui semble pas, et il ne semble pas non plus à ses amis que la mort le séparera de nous. Celui qui s'en va tout à fait, c'est celui qui croit finir et ne tend la main à personne pour qu'on le suive ou le rejoigne.

Et bonsoir, cher ami de mon cœur. On sonne la représentation. Maurice nous régale ce soir des marionnettes. C'est très amusant et le théâtre est si joli ! un vrai bijou d'artistes. Que n'es-tu là ! C'est bête de ne pas vivre porte à porte avec ceux qu'on aime. (op. cit., pp. 314-317)

10. ○…Je m'occupe exclusivement de l'histoire de 48. (op. cit., p. 331)

○…ce qui m'occupe surtout c'est la révolution de 48. (ibid., p. 332)

11. J'ai reçu hier le volume de votre fils. Je vais m'y mettre quand je serai débarrassé de lectures moins amusantes probablement. Ne l'en remerciez pas moins en attendant, chère maître.

D'abord, parlons de vous, «de l'arsenic». Je crois bien ! Il faut boire du fer, se promener et dormir et aller dans le Midi, quoi qu'il en coûte, voilà ! Autrement, la *femme en bois* se brisera. Quant à de l'argent, on en trouve ; et le temps, on le prend. Vous ne ferez rien de ce que je vous conseille, naturellement. Eh bien ! vous avez tort, et vous m'affligez.

Non, je n'ai pas ce qui s'appelle des soucis d'argent ; mes revenus sont très restreints, mais sûrs.

Seulement, comme il est dans l'habitude de votre ami d'anticiper sur iceux, il se trouve gêné par moments, et il grogne «dans le silence du cabinet», mais pas ailleurs. A moins de bouleversements extraordinaires, j'aurai toujours de quoi manger et me chauffer jusqu'à la fin de mes jours. Mes héritiers sont ou seront riches (car c'est moi qui suis le pauvre de la famille). Donc, zut !

Quant à gagner de l'argent avec ma plume, c'est une prétention que je n'ai jamais eue, m'en reconnaissant radicalement incapable.

Il faut donc vivre en petit rentier de campagne, ce qui n'est pas extrêmement drôle. Mais tant d'autres, qui valent mieux que moi, n'ayant pas le sol, ce serait injuste de se plaindre. Accuser la Providence est d'ailleurs une manie si commune, qu'on doit s'en abstenir par simple bon ton.

Encore un mot sur le pécune et qui sera secret entre nous. Je peux, sans que ça me gêne *en rien*, dès que je serai à Paris, c'est-à-dire du 20 au 23 courant, vous prêter mille francs, si vous en avez besoin pour aller à Cannes. Je vous fais cette proposition carrément, comme je la ferais à Bouilhet ou à tout autre intime. Pas de cérémonie ! voyons !

Entre gens du monde, ça ne serait pas convenable, je le sais ; mais entre troubadours on se passe bien des choses.

Vous êtes bien gentille avec votre invitation d'aller à Nohant. J'irai, car j'ai grande envie de voir votre maison. Je suis gêné de ne pas la connaître, quand je pense à vous. Mais il me faut reculer ce plaisir-là jusqu'à l'été prochain. J'ai actuellement besoin de rester à Paris quelque temps. Trois mois ne sont pas de trop pour tout ce que je veux y faire.

Je vous renvoie la page de ce bon Barbès, dont je connais la *vraie* biographie fort imparfaitement. Tout ce que je sais de lui, c'est qu'il est honnête et héroïque. Donnez-lui une poignée de main de ma part, pour le remercier de sa sympathie. Est-il, *entre nous*, aussi intelligent que brave ?

J'aurais besoin, maintenant, que des hommes de ce monde-là fussent un peu francs avec moi, car je vais me mettre à étudier la révolution de 48. Vous m'avez promis de me chercher dans votre bibliothèque de Nohant : 1° un article de vous sur les faïences ; 2° un roman du père X***, jésuite, sur la sainte Vierge.

Mais quelle sévérité pour le père Beuve, qui n'est ni jésuite ni vierge ! Il regrette, dites-vous, «ce qu'il y a de moins regrettable, entendu comme il l'entendait». Pourquoi cela ? Tout dépend de l'*intensité* qu'on met à la chose. Je vous trouve au fond infestée (en cette matière) de catholicisme, ô chère maître.

Les hommes trouveront toujours que la chose la plus sérieuse de leur existence, c'est jouir.

La femme, pour nous tous, est l'ogive de l'infini. Cela n'est pas noble, mais tel est le vrai fond du mâle. On blague sur tout cela, démesurément ! Dieu merci pour la littérature, et pour le bonheur individuel aussi ? N'importe. Gloire à Vénus.

《Elle a du bon, la rosse ! Allons ! Allons !》

(Doit être dit en Grassot)

Des voluptés, essayons le délire !

Couronnez-moi de fleurs ! Apportez-moi ma lyre !

Que le vin coule !

Que mon pied foule

Les parfums les plus doux.

(L'abbé Delille).

Ah ! je vous ai bien regrettée tantôt. Les marées sont superbes, le vent mugit, la rivière blanchit et déborde. Elle vous a des airs d'océan qui font du bien.

Adieu. Je vous embrasse comme je vous aime, très tendrement. (ibid., pp. 325-327)

12. Non, je ne suis pas catholique, mais je proscriis les monstruosités. Je dis que le vieux laid qui se paie des tendrons ne fait pas l'amour et qu'il n'y a là ni cyprès, ni ogive, ni infini, ni mâle, ni femelle. Il y a une chose contre nature car ce n'est pas le désir qui pousse le tendron dans les bras du vieux laid, et là où il n'y a pas liberté et réciprocité, c'est un attentat à la sainte nature. Donc ce qu'il regrette n'est pas regrettable, à moins qu'il ne croie que ses petites cocottes regretteront sa personne—et je vous le demande, regretteront-elles autre chose que leur malpropre salaire ? Ceci a été la gangrène de ce grand et admirable esprit, si lucide et si sage à tous autres égards. On pardonne tout à ceux qu'on aime, quand on a à les défendre de leurs ennemis. Mais ce que nous disons entre nous deux est enterré, et je peux vous dire que le vice a bien gâté mon vieux ami.

Il faut croire que nous nous aimons tout de bon, cher camarade, car nous avons eu tous les deux en même temps la même pensée. Tu m'offres mille francs pour aller à Cannes, toi qui es gueux comme moi, et quand tu m'as écrit que tu étais *embêté* de ces choses d'argent, j'ai rouvert ma lettre pour t'offrir la moitié de mon avoir, qui se monte toujours à deux mille, c'est ma réserve. Et puis, je n'ai pas osé. Pourquoi ? C'est bien bête, tu as été meilleur que moi, tu as été tout bonnement au fait. Donc je t'embrasse pour cette bonne pensée et je n'accepte pas. Mais j'accepterais, sois-en sûr, si je n'avais pas d'autre ressource. Seulement, je dis que si quelqu'un doit me prêter, c'est le seigneur Buloz, qui a acheté des châteaux et des terres *avec mes romans*. Il ne me refuserait pas, je le sais. Il m'offre même. Je prendrai donc chez lui s'il le faut. Mais je ne suis pas en état de partir. Je suis retombée ces jours-ci. J'ai dormi 36 heures de suite, accablée. A présent je suis sur pied, mais faible. Je t'avoue que je n'ai pas l'énergie de *vouloir* vivre. Je n'y tiens pas, me déranger d'où je suis bien, chercher de nouvelles fatigues, me donner un mal de chien pour renouveler une vie de chien, c'est un peu bête, je trouve : quand il serait si doux de s'en aller comme ça, encore aimant, encore aimé, en guerre avec personne, pas mécontent de soi et rêvant des merveilles dans les autres mondes ce qui suppose l'imagination encore assez fraîche.

Mais je ne sais pourquoi je te parle de choses réputées tristes, j'ai trop l'habitude de les envisager doucement. J'oublie qu'elles paraissent affligeantes à ceux qui sont dans la plénitude de la vie. N'en parlons plus et laissons faire le printemps qui va peut-être me souffler l'envie de reprendre ma tâche. Je serai aussi docile à la voix intérieure qui me dira de marcher qu'à celle qui me dira de m'asseoir.

Ce n'est pas moi qui t'ai promis un roman sur la S[ain]te-Vierge. Je ne crois pas du moins. Mon article sur la faïence je ne le trouve pas. Regarde donc s'il n'a pas été imprimé à la fin d'un de mes volumes pour compléter la dernière feuille. Ça s'appelait *Giovanni Freppa*, ou *les majoliques*.

Oh mais, quelle chance ! En t'écrivant, il me revient dans la tête un coin où je n'ai pas cherché.—J'y cours, je trouve ! Je trouve bien mieux que mon article, et je t'envoie trois ouvrages qui te rendront aussi savant que moi. Celui de Passeri est charmant.

Barbès est une intelligence, certes, mais en *pain de sucre*. Cerveau tout en hauteur, un crâne *indien* aux instincts doux, presque introuvables ; tout pour la pensée métaphysique devenant instinct

et passion qui dominant tout. De là un caractère que l'on ne peut comparer qu'à celui de Garibaldi. Un être invraisemblable à force d'être saint et parfait. Valeur immense, sans application immédiate en France. Le milieu a manqué à ce héros d'un autre âge ou d'un autre pays.

Sur ce, bonsoir. Dieu, que je suis *veau* ! Je te laisse le titre de *vache* que tu t'attribues dans tes jours de lassitude. C'est égal, dis-moi quand tu seras à Paris. Il est probable qu'il me faudra y aller quelques jours pour une chose ou l'autre. Nous nous embrasserons, et puis vous viendrez à Nohant cet été. C'est convenu, il le faut !

Mes tendresses à la maman et à la belle nièce.

Tu m'accuseras réception des 3 brochures, ce serait unre perte. (op. cit., pp. 328-330)

13. Cher bon ami, l'ami de ton cœur, le vieux troubadour se porte comme dix mille hommes, —qui se portent bien, et il est gai comme un pinson, puisque de nouveau le soleil brille et la copie marche. Il ira probablement bientôt à Paris pour la pièce de son fils Dumas, tâchons d'y être ensemble. (...)

T'amuses-tu à Paris ? Y es-tu aussi sédentaire qu'à Croisset ?

En ce cas je ne t'y verrai guère, à moins que je n'aille te voir. Tu me diras les heures où tu ne reçois pas le beau sexe et où les troubadours sexagénaires ne dérangent pas.

Cadio est tout refait et récrit jusqu'à l'endroit que je t'ai lu, c'est moins infect.

Je ne fais pas *Mont-Revêche*. Je te conterai ça. C'est toute une histoire. Je t'aime et je t'embrasse de tout mon cœur.

Ton vieux

George Sand

As-tu reçu mes brochures sur la faïence ? Tu ne m'as pas accusé réception. C'était envoyé à Croisset au lendemain de ta dernière lettre. (ibid., pp. 359-360)

14. Je suis tout réjoui de savoir que vous allez bien. Mais il ne faut plus s'éreinter de travail, ni se croire une «femme en bois».

Il me semblait que je vous avais accusé réception des brochures sur les faïences ? Mille excuses, chère maître.

Mais certainement je compte sur votre visite dans mon domicile privé ! Quant aux encombrements qu'y peut apporter le Beau Sexe, vous ne vous en apercevrez pas (soyez-en sûre), pas plus vous que les autres. Mes petites histoires de Cœur ou de Sens ne sortent pas de l'arrière-boutique. Mais comme il y a loin de mon quartier au vôtre et que vous pourriez [*sic*] faire une course inutile, dès que vous serez à Paris donnez-moi un rendez-vous. Et nous en prendrons un autre pour dîner seul à seul les deux coudes sur la table.

J'ai envoyé à Bouilhet votre petit mot affectueux.

A l'heure qu'il est, je suis écœuré par le populaire qui se rue sous mes fenêtres à la queue du bœuf-gras ! Et on dit que l'Esprit court les rues !!!

Adieu, à bientôt ! C'est singulier comme j'ai envie de vous revoir ! aussi je vous embrasse très fort.

Votre vieux

Gve Flaubert.

(éd. A. Jacobs. p. 131)

15. Ton vieux troubadour a encore été sur le flanc. A tout moment sa vieille guitare menace de se casser. Et puis il dort 48 heures et il est guéri—mais faible, et il ne pourra pas être à Paris le 16 comme il en avait l'intention. (op. cit., p. 370)

16. Chère maître,

Vous devriez vraiment aller voir le soleil quelque part. C'est bête d'être toujours souffrant. Voyagez donc ! reposez-vous. La résignation est la pire des vertus.

J'aurais besoin d'en avoir pour supporter toutes les bêtises que j'entends dire ! Vous n'imaginez pas à quel point on en est. La France, qui a été prise quelquefois de la danse de Saint-Guy (comme sous Charles VI), me paraît maintenant avoir une paralysie du cerveau. On est idiot de peur : peur de la Prusse, peur des grèves, peur de l'Exposition qui «ne marche pas», peur de tout. Il faut remonter jusqu'en 1849 pour trouver un pareil degré de crétinisme.

On a tenu, au dernier Magny, de telles conversations de portiers, que je me suis juré intérieurement de n'y pas remettre les pieds. Il n'a été question tout le temps que de M. de Bismarck et du Luxembourg. J'en suis encore gorgé ! Au reste, je ne deviens pas facile à vivre ! Loin de s'émousser, ma sensibilité s'aiguise ; un tas de choses insignifiantes me font souffrir. Pardonnez-moi cette faiblesse, vous qui êtes si forte et si tolérante !

Le roman ne marche pas du tout. Je suis plongé dans la lecture des journaux de 48. Il m'a fallu faire (et je n'en ai pas fini) différentes courses à Sèvres, à Creil, etc.

Le père Sainte-Beuve prépare un discours sur la libre pensée, qu'il lira au Sénat, à propos de la loi sur la presse. Il a été très crâne, savez-vous.

[...]

Certainement, j'irai à Nohant. Mais quand revenez-vous à Paris ? Mille tendresses de votre. (op. cit., p. 344)

17. Je m'ennuie de ne pas avoir de vos nouvelles, chère maître. Que devenez-vous ? Quand vous reverrai-je ?

Mon voyage à Nohant est manqué. Voici pourquoi. Ma mère a eu, il y a huit jours, une petite attaque. Il n'en reste rien, mais cela peut recommencer. Elle s'ennuie de moi et je vais hâter mon retour à Croisset. Si elle va bien vers le mois d'août et que je sois sans inquiétude, *pas n'est besoin* de vous dire que je me précipiterai vers vos pénates.

En fait de nouvelles, Sainte-Beuve me paraît gravement malade. Et Bouilhet vient d'être nommé bibliothécaire à Rouen.

C'est aujourd'hui jour de Magny. Mais je n'y vais pas, les meilleurs y manquent.

Depuis que les bruits de guerre se calment, on me semble un peu moins idiot. L'écoeurement que la lâcheté publique me causait s'apaise.

J'ai été deux fois à l'Exposition ; cela est écrasant. Il y a des choses splendides et extraordinaires. Mais l'homme n'est pas fait pour avaler l'infini ; il faudrait savoir toutes les sciences et tous les arts pour s'intéresser à tout ce qu'on voit dans le Champ-de-Mars. N'importe, quelqu'un qui aurait à soi trois mois entiers et qui viendrait là tous les matins prendre des notes s'épargnerait par la suite bien des lectures et bien des voyages.

On se sent là très loin de Paris, dans un monde nouveau et laid, un monde énorme qui est peut-être celui de l'avenir. La première fois que j'y ai déjeuné, j'ai pensé tout le temps à l'Amérique et

j'avais envie de parler nègre.

Donc, je vais, dans quinze jours, regagner Croisset.

Après trois mois de séjour ici, où, selon ma coutume, j'ai fait à peu près la quinzième partie de ce que je voulais faire.

Mille amitiés à Maurice. Je vous embrasse tendrement. Votre vieux
(ibid., p. 350)

18. Cher ami de mon cœur, je vas bien, je travaille, j'achève *Cadio*, il fait chaud, je vis, je suis calme —et triste, je ne sais guère pourquoi. Dans cette existence si unie, si tranquille et si douce que j'ai ici, je suis dans un élément qui me débilite moralement en me fortifiant au physique, et je tombe dans des spleens de miel et de roses qui n'en sont pas moins des spleens. Il me semble que tous ceux que j'ai aimés m'oublient et que c'est justice, puisque je vis en égoïste, sans avoir rien à faire pour eux. J'ai vécu de dévouements formidables, qui m'écrasaient, qui dépassaient mes forces et que je maudissais souvent. Et il se trouve que n'en ayant plus à exercer, je m'ennuie d'être bien. Si la race humaine allait très bien ou très mal, on se rattacherait à un intérêt général, on vivrait d'une idée, illusion ou sagesse. Mais tu vois où en sont les esprits, toi qui tempêtes avec énergie contre les trembleurs. Cela se dissipe, dis-tu ? mais c'est pour recommencer ! Qu'est-ce que c'est qu'une société qui se paralyse au beau milieu de son expansion parce que demain peut amener un orage ? Jamais la pensée du danger n'a produit de pareilles démoralisations. Est-ce que nous sommes déchus à ce point qu'il faille nous prier de manger, en nous jurant que rien ne viendra troubler notre digestion ? Oui, c'est bête, c'est honteux. Est-ce le résultat du bien-être, et la civilisation va-t-elle nous pousser à cet égoïsme maladif et lâche ? Mon optimisme a reçu une rude atteinte dans ces derniers temps.

(…) (op. cit., pp. 407-408)

19. Je m'en retourne vers ma mère lundi prochain, chère maître, et d'ici là je n'ai guère l'espoir de vous voir !

Mais quand vous serez à Paris, qui vous empêchera de pousser jusqu'à Croisset, où tout le monde vous adore, y compris moi !

Sainte-Beuve a enfin consenti à voir un spécialiste et à se faire sérieusement traiter. Aussi va-t-il mieux. Son moral est remonté.

La place de Bouilhet lui donne quatre mille francs par an et le logement. Il peut, maintenant, ne plus penser à *gagner sa vie*, ce qui est le vrai luxe.

On ne parle plus de la guerre, on ne parle plus de rien. L'Exposition seule «occupe tous les esprits» et les cochers de fiacre exaspèrent tous les bourgeois.

Ils ont été bien beaux (les bourgeois) pendant la grève des tailleurs. On aurait dit que *la Société* allait crouler.

Axiome : la haine du bourgeois est le commencement de la vertu. Moi, je comprends dans ce mot de «bourgeois» les bourgeois en blouse comme les bourgeois en redingote. C'est nous, et nous seuls, c'est-à-dire les lettrés, qui sommes le peuple, ou pour parler mieux, la tradition de l'humanité.

Oui, je suis susceptible de colères désintéressées, et je vous aime encore plus de m'aimer pour cela. La bêtise et l'injustice me font rugir. Et *je gueule*, dans mon coin, contre un tas de choses «qui ne me regardent pas».

Comme c'est triste de ne pas vivre ensemble, chère maître ! Je vous admirais avant de vous connaître. Du jour que j'ai vu votre belle et bonne mine, je vous ai aimée. Voilà. Aussi je vous embrasse très fort. Votre vieux

Je fais remettre rue des Feuillantines le paquet de brochures relatives aux faïences.

Une bonne poignée de main à Maurice. Un baiser sur les quatre joues de Mlle Aurore.

(op. cit., p. 351)

20. [...]

Je ne veux donc pas te dire adieu, mais au revoir, dès que je pourrai. Je t'aime beaucoup, mon cher vieux, tu le sais. L'idéal serait de vivre à longue année avec un bon et grand cœur comme toi. Mais alors on ne voudrait plus mourir, et quand on est *vieux* de fait, comme moi, il faut bien se tenir prêt à tout.

[...] (op. cit., p. 422)